

令和4年7月15日から7月16日の大雨に伴う技術対策について（第2報）

宮城県では前線や暖かく湿った空気の影響により、7月15日から16日にかけて大雨となり、浸水や冠水が発生した地域があります。また、今後も降雨が予想されており、身の安全を確保した上で、農作物に対し下記の対策を実施してください。

○農作物等の技術対策

1 共通事項

- (1) 人命第一の観点から、ほ場の見回り等については気象情報を十分に確認し、足下等、ほ場周辺の安全が確保されてから行う。その際、増水した水路やその他の危険な場所には近づかず、転落、滑落事故に遭わないよう慎重に行う。
- (2) 作業にあたっては、水分補給等熱中症対策を取り、体調管理をしっかりと行う。
- (3) 浸冠水したほ場では、できるだけ速やかに排水対策（畑作物では明きよ等の設置）を講じる。
- (4) すでに設置されている明きよや排水溝が破損していた場合は、補修する。
- (5) 排水口や側溝のゴミや泥は除去し、排水を促す。
- (6) 浸冠水の被害を受けた農作業機械や設備等は、使用する前に販売店等に依頼して動作確認を行う（水抜きができていない状態でエンジンを始動したり、電源を入れたりすると、重大な故障や事故に繋がるので注意する）。
- (7) 排水後の管理に向け、各作物に合わせた資材（農薬、肥料等）を手配しておく。

2 水 稲

- (1) 浸冠水した水田では、排水溝や側溝等に詰まったゴミを除去し早期の排水に努める。
- (2) 冠水や浸水した稲は体内の水分を失いやすい状態になっているので、急激な落水は避けるようにする。
- (3) 稲に付着した泥は可能であれば動力噴霧機等で散水して洗い流す。
- (4) 生育が遅れ、葉色が濃くなった場合は、いもち病が発生しやすいので、ほ場を観察し、農薬散布等による防除に努める。
- (5) 浸水により生育が遅れた場合、イネツトムシが多発する可能性があるのではほ場を観察し、農薬散布等による防除に努める。
- (6) 黄化萎縮病が発生した水田ではいもち病が発生しやすいので、ほ場を観察し、防除に努める。
- (7) 白葉枯れ病は低湿地で発生しやすく暴風雨で発病を助長するのではほ場を観察し、防除に努める。
- (8) 生育が遅れて葉色が期待葉色値よりも濃くなった場合は追肥を見合わせる。
- (9) 生育時期別の冠水日数と減収歩合は表1のとおり。

表1 水稻における生育時期別の冠水日数と減収歩合（％）

被害時生育段階	冠水日数（日）				備考
	1	3	5	7	
幼穂形成期	—	30	60	70	幼穂枯死が多い
出穂期前13日	25	80(70)	90(70)	100(70)	二段穂を生ず それが稔実すれば補 償が見られる。
出穂期前10日	75	100(70)	100(70)	100(80)	
出穂期前7日	40	80	95(85)	100(95)	

農林省統計調査部 農林17号 () 内：二段穂が稔実した場合

「農業災害ハンドブック（農作物気象災害技術対策指針）」平成2年3月 宮城県農政部より抜粋

3 大豆

- (1) 湿害を防止するため、排水溝や暗きよの点検を行い、排水に努める。
- (2) 播種から出芽前までの大豆は、長時間冠水すると著しく出芽率が低下する。
- (3) 出芽不良や芽が腐敗している割合が多い場合は、まき直し等を検討する。まき直しの場合は晩播適応性の高い品種（タンレイ、あやこがね）とし、時期を逸しないように播種する。
- (4) 排水後、ほ場の乾燥を待って中耕培土を行う。その際、生育が不良の場合は追肥を検討する。追肥は窒素成分で10a当たり2kg程度施用し、その後中耕培土を行う。
- (5) 浸冠水期間と被害割合は表2のとおり。

表2 大豆における浸冠水期間と被害割合（％）

		冠水期間			
		1日未満	1日以上2日未満	2日以上3日未満	3日以上
被害割合 （％）	冠水	5	15	50	100
	浸水	3	15	40	65

（注意1）開花期までの生育初期から生育中期の大豆に適用する。

（注意2）にごりのある停滞水の場合に適用する。

「農業災害ハンドブック（農作物気象災害技術対策指針）」平成2年3月 宮城県農政部より抜粋

4. 1 園芸作物全般

- (1) 浸水した場合は、速やかに排水を図る。冠水した場合は、茎葉に付着した泥土が乾かないうちに動噴等を利用して、清水で洗い流し、予防のため速やかに登録のある殺菌剤を散布する。
- (2) 生育状況や影響を確認し、速やかに回復を図るための薬剤や液肥の散布を行う。
- (3) 回復が見込まれない場合は、速やかに播き直しや他品目等に切り替える。

4. 2 露地野菜・花き

- (1) 水はけの悪いほ場では、額縁明きよをもうけ、排水路を確保する等できる限り排水対策を行う。
- (2) キャベツ等葉茎菜類については、風雨により茎葉の傷みや根元が動き浮いていることも考えられるので、土寄せを行い、各種病害の防除を行う。
- (3) きゅうり等果菜類の支柱やネットの点検、補修を行い、各種病害の防除を行う。
- (4) きくやその他切り花類は、支柱やフラワーネットの点検、補修を行い、万一、倒伏した場合は、直ちに支柱を立て直す。茎葉が被害を受けた場合など、各種病害が発生しやすいので、応急的に殺菌剤を散布する。

4. 3 施設野菜・花き

- (1) 天候回復後は施設各部を点検し、被覆材等破損したものは直ちに補修する。また、環境制御装置や補光関連設備等も、速やかに作動状況を点検して修理する。
- (2) 浸水した場合は、早期の排水に努める。また、地中内の給排水する管についても詰まり等が無いことを確認してから使用する。電気設備については自己判断せず、業者へ依頼する。
- (3) 野菜の耐水性（冠水）は表3のとおり。

表3 野菜の耐水性（冠水）

冠水に耐える時間	品 目
5 時間以下	キュウリ, キャベツ, トマト, ダイコン, ツケナ
7～8 時間	インゲン, ホウレンソウ, カボチャ, タマネギ
1 日	ダイズ, ゴボウ, ナス, セルリー
2 日	ネギ, ラッキョウ, ショウガ
3 日	ラッカセイ, ニラ
5 日	サトイモ, ヤマイモ, シソ

(二井内 1953)

被害時生育段階：生育期（6月26日）午前11時 水温19.8℃

調査時生育段階：退水後

「農業災害ハンドブック（農作物気象災害技術対策指針）」平成2年3月 宮城県農政部より抜粋

4. 4 果 樹

- (1) りんごやもも等は倒伏等の被害がないか点検し、倒伏があった場合には根が乾かないうちに速やかに起こし、支柱で支える。日本なしやぶどうは棚を点検し、不具合箇所は修繕する。
- (2) 排水不良園では、明きよの掘削を行い、早急に園地の排水対策を行う。
- (3) 土砂が堆積した場合は、幹を中心に直径2 m程度取り除き、土が乾いたら耕耘する。

5 家 畜

- (1) 畜産施設で損傷等があった場合は、必要に応じて補修・補強を行う。
- (2) 天候回復後、畜舎内及び周辺の排水と流入した土砂の除去を行う。
- (3) 畜舎等の破損、汚染状況を確認し、必要に応じて補修、洗浄、消毒を行うとともに、飲水に適した水の確保や家畜の健康観察を徹底し、伝染性疾病の発生予防に努める。

6 飼料作物

- (1) 雨水が停滞しやすいほ場では、排水溝を整備して排水に努める。
- (2) 浸冠水した場合は、早期の排水に努める。
- (3) 草地や牛舎周辺に積んでいるラップサイロのフィルムが破損した場合は、早急に補修専用の粘着テープで補修する。
- (4) ラップフィルムの破損や冠水等で飼料が変質した場合は、給与せず廃棄する。